〔千載和歌集十四戀〕戀の歌とてよめる　太皇太后宮小侍從

戀そめし心の色のなにになればおもひかへすにかへらざるらん

〔倭訓栞前編九古〕こゝろしらひ　源氏に見ゆ、日本紀に、通字有意字などをよめり、しらひは知也、らひ反り也、

〔日本書紀二十八天武〕四年〇天智十月庚辰、天皇〇天智臥病以痛之甚矣、於是遣蘇賀臣安麻侶、召東宮〇天武引入大殿、時安摩侶素東宮所好、密顧東宮曰、有意而言矣、東宮於茲疑有隱謀而愼之、

〔源氏物語五十東屋〕御文などをみせさせ給へかし、ふりはへさかしらめきて、心しらひのやうにおもはれ侍らんも、いまさらにいがたうめにや、

〔源氏物語四夕顏〕なんでんのをにの、なにがしのおとゞを、おびやかしけるためしを、おぼしいで、心づよく、〇略下

〔拾遺和歌集十四戀〕題しらず　よみ人しらず

みちのくのあだちのはらのしらま弓心こはくも見ゆる君かな

〔古今和歌集十五戀〕寛平御時、きさいのみやの歌合のうた、　すがの丶た丶をむ

つれなきを今は戀じと思へども心よはくもおつる涙か

〔源氏物語三十九夕霧〕ことさらにこゝろうき御心がまへなりと、またいひかへしうらみ給つゝ、はるかにのみもてなし給へり、

〔倭訓栞前編九古〕こゝろおきて　日本紀に厝懷をよめり、源氏に多き詞也、されど日本紀の意は、遠慮する義也、後撰集に、

今ははや打とけぬべき白露の心おくまで夜をやへにける、とよめる是也、源氏にいふは、心の處置をいへり、